

平塚柔道物語 7 1

上水監督と王子谷選手

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

平成26年の今年6月、平塚市にある東海大学柔道部は全日本学生優勝大会で連続7回目の優勝を果たし、記録を更新した。さらに、10月26日尼ヶ崎市で行われた全日本団体別団体優勝大会でも、8回目の優勝を達成、決勝では日大を6対0に押さえ、圧倒的勝利で終わっている。大会の前日には、NHKの衛星放送で、世界柔道選手権大会の5人のメダリストを育てたという上水研一朗監督が「日本柔道復活の秘業」と題して、45分間にわたり放映された。それは上水監督の独創的な指導法で、現実に前人未到の領域を突き進んでいるからである。

平塚柔道協会出身の真田教師の弟子でもある那須・吉野・藤田君なども上水監督には大変にお世話になっている。上水監督は、当協会の指導者である真田教師と、高校大学での同級生であり、親友でもあるという。現在、上水監督のお子さん2人を当協会でお預かりしているのであるが、真田教師に「子供をたのむ」との上水監督の言葉に、「よしわかった」と真田教師は応えている。共に汗を流した親友の会話する姿を見ながら、すがすがしい気持ちになった。上水氏は礼儀正しく、笑顔の人でもある。体は大きいですが、腰は低く、感じが良い。7回連続優勝したなどという驕った姿は微塵も感じられない。大変謙虚な人であり、品格も感じられるのだ。それにしても東海大学は実際にどのような練習をしているのか、また『上水監督の指導法とはいかなるものか』に私は関心を持ち、監督の許可を受け、見学に行かせて頂いた。広い道場に入ると、100名以上の選手達が稽古をしていたが、当協会出身の那須君、吉野君、藤田君が顔を見せ、「会長、こんにちは！」と元気に挨拶してくれた。そして、そこには、今をときめく東海大主将の王子谷剛志（今年4月の全日本選手権の優勝者、アジア大会の重量級優勝者）がいた。そこで私は王子谷選手に監督の指導法について尋ねてみた。彼は顔が童顔でかわいい顔

をしているが、体は大きく186cmで130kgである。彼は感じ良く答えてくれた。「私は今までの中学高校時代に、がむしゃらな練習をして来ました。しかし、大学で上水監督に言われたことは『量より質を高める練習をせよ』、練習時間も以前には1日に4時間程度やってきましたが、ここでは2時間半になっています。監督は『人が集中できる時間は限られているものだ。だからこの2時間半の1つ1つの練習に全力投球せよ!』とされています。また『質を良くする努力とは何か? それは考える柔道である』そして監督は私達に考えるヒントを与えてくれるのです。『お前の柔道は、ここがこうだから、こういうふうにした方が良いのではないか』というように話しかけ、必ずその理由まで教えてくれるのです。監督は私達に押し付けるようなことはなく、対話を重視しているのです。そこで私達が考えてみると、私自身が様々なことに気が付き、結果が向上していくのです。さらに、監督はある試合の一部を想定した部分稽古をさせます。『このような苦しい状況になった場合はどうするのか』という稽古です。このような稽古を続けることで、現実に遭遇した場合には冷静に対処することができるのです」と、彼は自分の最近に行われたアジア大会での決勝戦の時の貴重な体験を話してくれた。「決勝ではポイントを取っておきながら、あと1分というところで、肩を脱臼してしまいました。しかし、部分稽古の体験を思い起こし、冷静に対処して、最後まで落ち着いて戦い抜き、勝つことができたのです」と淡々と語ってくれた。

— 続く —



王子谷選手と筆者